

— ざいそう —

## ボーダーレスに思う

田中 利典



『着陸と同時に、乗客達の間で自然と拍手が沸き起こった。7月30日、チューリッヒ空港に到着。生涯初、ヨーロッパ大陸に足を踏み入れた。スイス人の友達の家に数日泊まった後、一人で欧州周遊へ出発。旅を始める前に決めていたことは2つあった。ひとつは、最終目的はパリということ。もうひとつは、ミケランジェロの3体のピエタを見ること。それ以外の計画は敢えて立てなかった。予定より、その時の気分を優先する旅をしたかったから。イタリアでは、ミケランジェロに惚れた！晩年は腕が不自由になりながらも、死ぬ数日前まで必死で作品作りに没頭したミケランジェロ。そして、もっとも感銘を受けたのは、バチカンのピエタ。20代前半時の作品。今の自分の年齢だ。文字通り、鳥肌が立った。何故か涙が溢れてきた。この気持ちは実際に見た人にしか分からないだろう。とにかく訴えてくるものが凄い！聖母マリアが異様に若々しい。イタリアをはじめ、オーストラリア、チェコ、ギリシア、ドイツ、フランスを訪れた。旅を続けていくにつれて、旅のスタイルを身につけてきた。…(中略)…これ以外にも、たくさん人の親切に触れた。言葉は通じなかったけど、心で会話をすることができたチェコ人のおじいさん、最後までおれを“Simpatico Giapponess”（イタリア語、nice Japaneseの意味）と呼んでいたヴェネツィアのおばさん、列車の中で知り合って自分が関わっているCDをくれたミラノのおじいさん、偶然にも旅の途中で2度遭遇し、一時行動を共にしたデンマーク人の若者、一緒にプラハを散歩したアルゼンチン人、日本に興味を持ってくれたギリシア人、オルセー博物館で出会って、一緒にパリの街を夜通し歩いた日本人など、数え切れない人との出会いがあった。もし、どこかで一日でも旅の日程をずらしたら彼らに出逢う事はなかった。そう考えると、なんか、神様を信じたくなる。“人生の夏休み”の最後に、最高の仲間と、最高の財産を得た。出発した頃は真っ黒だったTシャツも、今ではメッセージで埋めつくされている。』

この体験記は私の友人の子息が学生生活最後の思い出にと、米国に次いで欧州一人旅をした時のものである。私が学生の頃にはとてもできなかった事を、いとも簡単に自由奔放にやってのけているこの青年の体験記には、驚きとوراやましさを覚えたものだ。私の青年期には、外国に行くなどという事はせいぜい旅行目的で、しかも数年に一度も行けば十分であり、それが当時では一般的

であったように思う。

ところが今日では、高校生、大学生においては官民で多種多様な留学制度が有り、数多くの学生がその制度を利用して数ヶ月から一年間の留学を、現地では一般的にホームステイという形で行っている。私が所属するロータリークラブでも高校生を対象に、毎年日本と外国との交換留学を行っているし、大学生を対象とした留学制度やアジアから日本に留学している学生への支援も行っている。私も数年前にロータリー交換留学生として来日したオーストラリアの女の子を我が家に3ヶ月間受け入れた事がある。

又、最近では18才から30才を対象とし、仕事をする事で滞在資金を補いながら最長1年間の海外生活を体験できるワーキングホリデーなる留学制度があり、日本では1980年にオーストラリアとの間でこの制度がスタートされ、以来ニュージーランド、カナダ、韓国、フランス、ドイツ、イギリスへと広がったようだ。この制度は「長期間の滞在によって相手国の文化と一般的な生活様式などを理解する」ことを前提とし、それによって「人生経験豊かで広い国際的視野を持った青少年を育成、ひいては両国間の相互理解、友好関係の促進を目的としている」との事。主目的はロータリー留学制度と同じである。現在まで日本人のワーキングホリデー利用者の総数は約15万人で、日本に来た若者は約4万4000人だそうである。

この様に日本の青年達が世界中のいろんな国へ行き、同世代の青年達と友達になり、その国の歴史や文化に触れ、言葉を覚え帰国する。外国を知ると同時にそれまでと違った日本が見えてくるに違いない。

こういう、いわゆる世界がボーダーレス化されていくなかで、日本の青年達が外国の青年達と互角に向き合っていて、世界という舞台上で頼もしく活躍していくためには、やはり日本の学校教育の見直しが迫られていることは当然の流れであろう。これまでの受験教育オンリーではなく、国際教育、語学（特に英語）教育、コンピューター教育などが同時に重要となり、又、日本人としてのアイデンティティ確立のための、日本の歴史、伝統、文化の教育も重要で、特に日本人としての誇りが持てる教育が最も大切なことではないかと思う次第である。